

阿寒摩周国立公園

阿寒摩周国立公園には、火山、湖、森などがあり、古代からの物語の宝庫です。日本最北端の都道府県、北海道の東に位置する阿寒摩周地域は、巨大な火山の噴火で阿寒カルデラが形成された、約 150,000 年前にできました。数千年の間、絶え間ない火山活動によって、地形が変わり、山脈、カルデラ、湖が形成されました。今なお残る原生的な自然には独自の生態系がいくつもあり、この広大な国立公園を探検すると、火山、河川、動植物などの相互関係に魅了されます。

阿寒摩周国立公園は、広さ 91,413 ヘクタールで、西の阿寒と東の摩周の、主な 2 つのエリアに分かれています。西側の中心地は阿寒湖で、マリモという緑色の珍しい藻の生育地として有名です。マリモは、直径 30 センチもの大きさの球形に育つことがあります。阿寒湖は世界最大級のマリモの群生地となっています。阿寒湖で繁茂できるのは、その特殊な地形により発生する波や、湖に差し込む光、湖底湧水の塩分などがマリモにとって最適な条件になっているおかげです。観光客は、マリモ展示観察センターや阿寒湖畔エコミュージアムセンターで、この魅惑的な生物を間近で見ることができます。

阿寒湖では、10 月には初雪が降り、冬になると、ボッケ周辺の地域以外では、最大約 1 メートルの積雪があります。ボッケとは、地下から絶え間なく噴出する煮え立つ泥のことです。この湖の湖畔沿いや湖の南にある山には、ボコボコと泡立つ泥沼があり、音が聞こえ、その匂いが立ち込めています。ボッケの近くの地面は一年中温かく、冬でさえも、エゾシカが食べ物を求めてやってくることや、コオロギの鳴き声が響き渡ることがあります。

屈斜路湖と摩周湖を中心に、国立公園の摩周側にも、同じように多様な自然環境があります。世界最大級のカルデラ湖の 1 つ、屈斜路湖はシベリアから渡ってくる数百羽のオオハクチョウの越冬地です。観光客は、露天温泉に入って、この美しい鳥をすぐそばに眺めることができます。

屈斜路湖でも摩周湖でも、暖かい時期の早朝に珍しい現象が見られます。「雲海」と呼ばれ、内陸に入ってくる海からの霧がこの 2 つの巨大なカルデラにある、窪んだ一帯に溜まるのです。暖かい空気は冷たい空気を下に閉じ込めるという気象現象のため、霧は湖の上を漂います。この幻想的な光景はカルデラの端にある展望台から眺めることができます。

公園の摩周側の中央には、硫黄山があります。この岩だらけの山は 19 世紀の硫黄の採掘でよく知られています。硫黄山周辺では、大小 1,500 の噴気孔から湯気が出ています。硫黄の特徴的な匂いが充満し、鮮やかな黄色い噴気孔が、この世のものとは思えない光景を作り上げています。火山性ガスが土壌の酸性度や周辺地域で生育できる植物に大きく影響しています。硫黄山の麓は、厳しい環境でも繁茂する 2 つの植物、ハイマツやイソツツジに覆われています。

阿寒摩周地域は、1934 年に国立公園に指定されましたが、この土地には、はるか昔からアイヌの人々が住んでいました。先住民であるアイヌは、自然と調和して共存する術を身につけていました。漁師、狩人であり、植物の採集も行い、すべての生き物は、目的を持って地上に送られた霊（魂）であると信じていました。ヒグマは、人々に食糧になる肉や、衣類になる毛皮を与えるために神の国から地上に降りてきた神の化身として崇められていました。現存するアイヌの人々は、もはや伝統的な生活様式で暮らしていませんが、伝統と文化は阿寒湖アイヌコタンや屈斜路コタンアイヌ民俗資料館のような場所に残されています。

阿寒摩周国立公園では、観光客は、アイヌについて学べるだけでなく、年間を通して、たくさんのアウトドア活動に参加できます。夏には、カヌーやキャンプがよく行われ、釣りを楽しむにも最高の季節です。秋には、鮮やかに紅葉する森を通るハイキングが人気です。冬は氷点下の気温となり、湖は氷結します。観光客は、ワカサギ釣りやスノーシューに挑戦できます。北海道の春は、日本の他の場所よりも遅くやってきます。通常、暖かくなるのは 5 月頃で、その後、風景はメアカンキンバイのような地域の名前が付いた花をはじめとし、様々なカラフルな花たちでいっぱいになります。

アイヌの故郷の 1 つである阿寒摩周国立公園は、野生生物や圧倒されるような自然の素晴らしさであふれています。ここは、発見され、探検されるのを待っている、日本の秘宝です。